藤原宮第５９次（西方官衙）
発掘調査現地説明会資料

深沢芳樹
1988年11月26日
奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部

調 査 地：　橿原市四分町
調査期間：　1988年8月～継続中
調査面積：　約2,600㎡

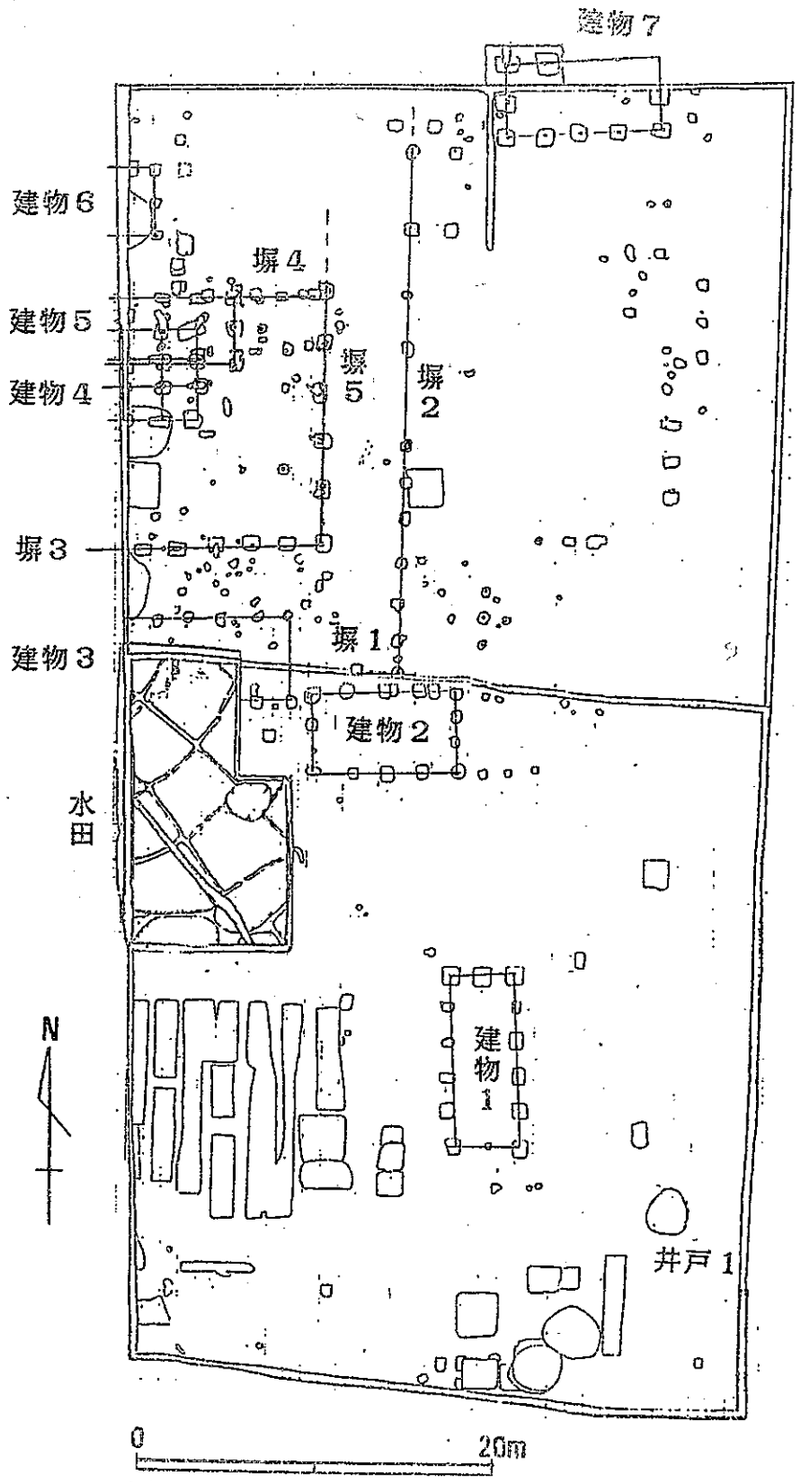
市営住宅の建て替えに伴い、東西約35m、南北約75mの範囲を調査した。調査地の都合で、まず南半分を、つづいて北半分を発掘した。この結果、藤原宮期とその直前の建物群を明らかにし、さらに調査区の一部を掘り下げたところ、弥生時代後期の水田遺構を検出し、弥生時代についても貴重な知見を加えることができた。

調査地は、藤原宮の西南隅部分にあたり、南面大垣と西面大垣に近接する。藤原宮の時期には、総柱建物４と東西棟建物７が建てられており、建物４は東西塀３と南北塀５で囲まれていた。

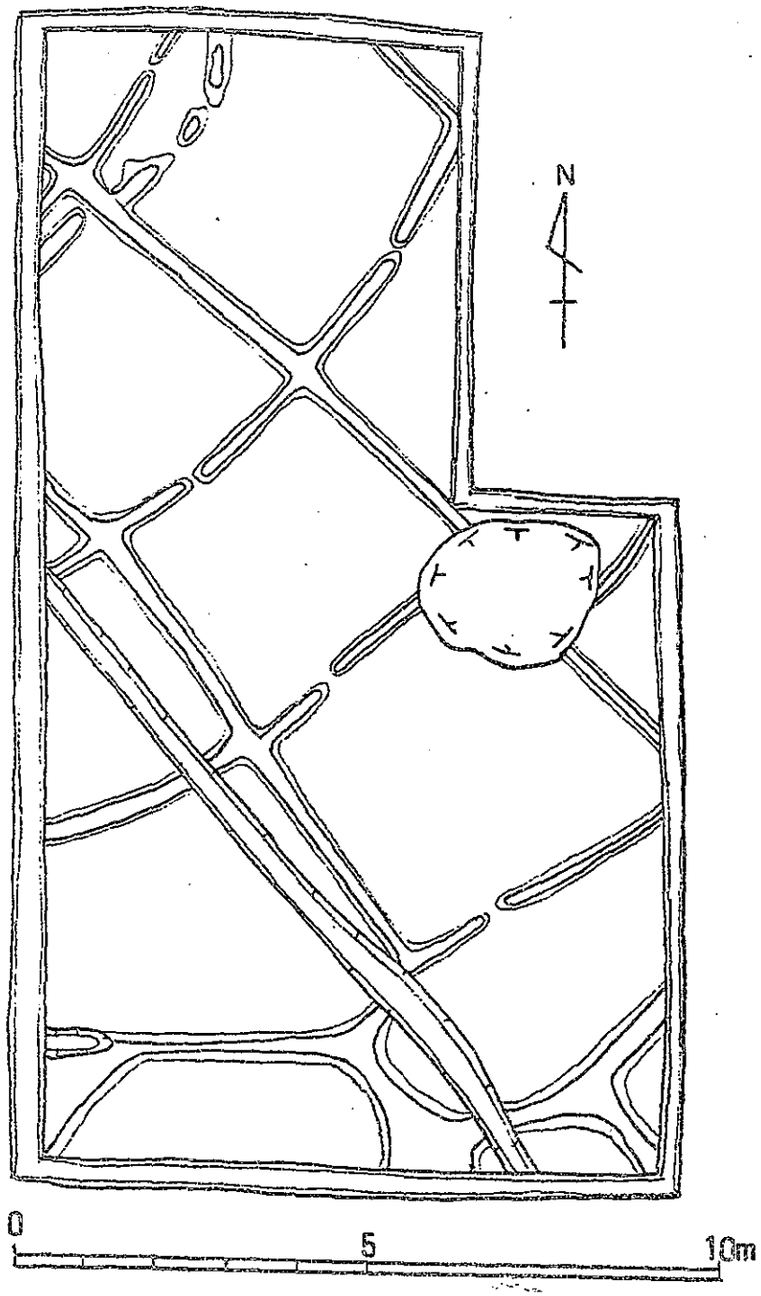
藤原宮直前の時期には、西一坊大路（現在の南北アスファルト道路の位置にほぼ相当）が調査区の東隣を南北に、また五条大路が調査区の北約20mを東西に走っていたことが、以前の調査で確かめられている。この時期には、南から建物１～３・５・６が建てられており、塀１・２・４もこれに伴うものとみられる。

上記建物などを調査終了後、柱穴などのない場所を選んで、東西6～9m、南北15mの範囲をさらに掘り下げてみた。この結果、弥生後期に属する水田をみつけることができた。水田面は、南東側が高く、北西側が約15cm低かった。南端の畔はやや大きいが、これ以外の畔は幅約15cm、高さ約10cmと小さい。この畔でだいたい4m四方に仕切られた水田が、調査区内に16枚整然と並んでいた。そしてよくみるとこの畔は、傾斜面の等高線に沿うものとこれを直角に交わって走るものの二種類で構成されている。そして、等高線に沿う畔には、水を田にひく水口が切ってあった。

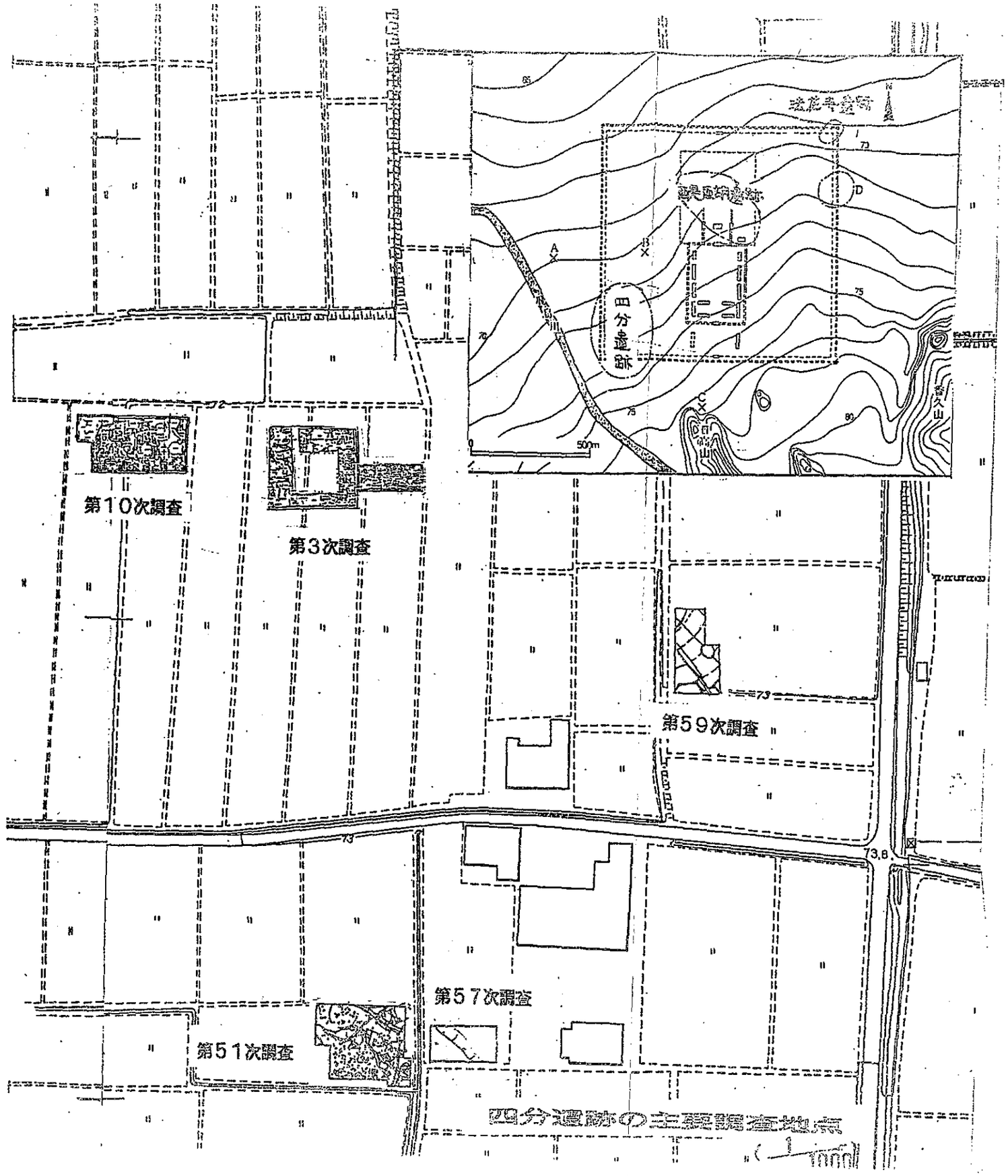
この水田の西側には、奈良県内でも有数の弥生時代のムラ、四分遺跡のあったことがわかっていた。このムラの水田が、一部ではあるが今回の調査で初めて明らかになったわけだ。そして、弥生時代の終末頃、突如ムラの規模を縮小するが、それはこの水田が土砂に埋もれた時期と見事に一致していることもわかった。



藤原宮第５９次調査遺構概略図


N
0
5
10m

水田平面図


第10次調査
第3次調査
第59次調査
第57次調査
第51次調査
四分遺跡の主要調査地点
四分遺跡
A
B
C
D
500m